



# AA日本ニュースレター

〒100-91  
東京都中央郵便局  
私書箱 916

AA 日本ゼネラル・サービス・オフィス TEL 03-3590-5377  
〒171-0014 東京都豊島区池袋 4-17-10 土屋ビル 4F FAX 03-3590-5419

No.72

## はじめまして どうぞよろしく!!

J.S.O 野崎

9月16日付で、J.S.O所長に就任いたしました野崎でございます、関東甲信越地域の北多摩地区、東村山グループをホームグループとして、AAとの様々な出会いにより飲まない生きかたを学ばせていただいています。

住まいが、近いこともあり時々オフィスへ出掛ける機会があったことも、今回の出来事に関係していると思います。ボランティアで協力させてもらうことで、自分の生きかたの勉強ができたようです。

とはいえオフィスの職員という仕事については、考えたこともなかった訳で、山本さんのご病気も、回復し次第、J.S.Oへ復帰できるものと思っていたのです。ところが、ご存じのとうりドクターストップがかかり、事情が変わってきました。常任理事からの要請があり、いろいろと考えてみました。現在の自分自身にできること...仕事・家族・AA、「ステップ1」のとおり、自らをアルコールと認める事で、これからの生きかたの結論がでたと思いません。

もちろん、簡単な気持ちで引き受けた訳ではありません。かなり心の葛藤があったのは事実です。27年近く携わって来た仕事を変えてしまうことができるのか？新しい仕事をすぐにできる力が自分にあるのだろうか？臆病で小心者があれこれ迷い悩んだ結果は...二つのものを見分ける賢さを。そしてAAを信じる事。

しかし、いま素直な感じを申し上げますと、大変なことが起こったものだ、さてどうしよう？という毎日が、かなりの緊張感と共に続いているのが現状です。

AAのプログラムに出会い、ミーティングに参加し続け、飲まない生きかたを教えていただいて来ましたが、残念ながら、AAの深く広がる共同体についての理解は乏しく、勉強不足を認めざるを得ません。グループ、地区、地域のサービスに触れること、

そして、わずかな範囲で自分なりの経験をいただいていたものの、全体サービスについての経験は、事務局のお手伝いを少しさせていただいただけなのです。ただ、AAのプログラムの通り、自らの無力を認め、先人の経験と知識を謙虚に受けとめることができれば、私にも、この大事な役割を担うことが可能だと信じられます。

何ともたよりのない人間が、と思われるでしょうが、しばしの間ご容赦いただき、暖かい目で見守っていただければ幸いです。

とにかく、今は日々の電話対応、連絡、お問い合わせにと、それからいろいろなJ.S.O業務...また、なにも出来ませんが...頭の中は飽和状態で皆様にご迷惑をおかけする事が、多々あると思います。お許しください。



そして、自分のまわりのミーティング会場以外の所へ出掛ける機会が少なく、メンバー、関係者の皆様とお話することの経験不足は、これからの、自分の大きな課題として、できるだけ努力したいと考えています。

オフィスの業務は、小宮山さん、高橋さん、吉村

さん、ボランティアの皆さんと共にチームワークよく行なっていますのでご安心ください。もちろん山本さんには、自宅での業務を、無理のないようにとお願いしています。ただし、病気が完全に治ったわけではないので、皆様からのお見舞いや、励ましの便りはまだまだ必要です、どうぞよろしく...

## W・S・M 通訳体験記

ダグ G. カリフォルニア、マウンテンビュー

### 【出発まで】

飲むのをやめて初めてAAのミーティングに出たとき、AAの人たちというのはどこかよその国の言葉を話しているのかと思った。そのうちに英語をしゃべっていることが分かったが、内容はまったく理解できなかつた。おそらくだからこそ、わたしたちは新しい人に90日間90回のミーティングに出るように言うのだろう。そこで話されている内容がわかるまでに、実際そのぐらいの日数がかかるのだ。わたしは日本語と英語をきちんと話せるが、わたしの日本語のポキャブラリーでは“AA用語”を理解することができなかつた。それを理解することが私の最大の関心事となり、すぐにAA単語帳作りにとりかかった。ステップ、伝統、概念の日本語版もプリントした。

私は今、カリフォルニア北部湾岸地域の副地区委員をさせていただき、毎月ペタルマで開かれる地域委員会に出席している。この地域にはスペイン語地区が4つあり、スペイン語と英語のバイリンガルメンバーが毎月行われる地域委員会と年4回の地域集会で通訳をし、スペイン語しか話さない代議員や地区委員が不都合なく参加できるよう便宜が図られている。8月の地域会議でわたしは本題とは別の動議を提出した。地域で使用しているワイヤレスの同時通訳機器をオークランドで開かれるWSMで使わせてもらえないかというお願いだった。反対者はおらず、そればかりか、彼らもまた、地球のほぼ反対側でメッセージを運ぶ一役を担えることに胸躍らせ、名誉に思ってくれた。スペイン語通訳者のローズは、サービス会議でどのように通訳したらよいかたくさんアドバイスをくれた。特に、手の届くところに必ずたくさん飲み水を用意しておくこと、自分のペースを守ること...。ワールドサービスミーティングではスペイン語の同時通訳があるが、通訳者は数

人が1チームになって、20~30分ごとにどんどん交代して通訳する。私は最初から最後まで一人でやらなければならない。

JSOの山本さんがとても助けになってくれ、私の作った準備メモを点検し、さらにサービスに関する単語帳にいくつかの用語を付け足してくれた。ニューヨークのGSOからは議事項目、ワークショップの質問項目、プレゼンテーション、カンントリーレポートのすべてが送られてきた。おかげで私は事前にWSMの内容を把握し、準備をすることができた。そのため、実際に会場で山宮さんに通訳するとき、とても助かった。どのような服装にしたらよいのかも迷った。私のために日本の評議員の人たちを困らせるようなことは一切したくなかつたからだ。

10月1日、荷造りをすべて終え、会社に寄ってやり残しの書類をバッグに入れ、空港に向かった。サンホセからロスへ。ロスからオークランドまでは12時間のフライトだ。ロスのフライト待ちの時間にスポンサーに連絡した。しっかりやってくるようにと励まされた。

午前3時、ちょうど太平洋の真ん中あたりを飛んでいた私に、感謝と栄誉と喜びの気持ちがあふれでてきた。神さまの判断でこのようなチャンスが今回私に与えられたのだ。涙があふれてきた。出発前は資料の準備にあまりにも心奪われていたため、このような感動を味わう時間はなかつた。私のスポンサーは私を誇りに思ってくれた。両親もそうだし、AAの仲間たちも同じ思いだった。でもときどき、本当は私たちだけが分かっていないのではと不安になったこともたびたびあった。神が私たちのためにどれほどのお考えを持っておられるのか、誰も知ることができない。でも神は私にとっていちばん良いことを望んでおられる。私はそれを信じている。神の前で私は簡単に考えるようにした。ビッグ

ブックの146ページに“われわれのほんとうの目的は、神と周囲の人びとへのできる限りの奉仕に自分を捧げることである”、そして233ページには“神は、われわれが幸福で、楽しく、自由であることを望まれる”と書かれている。神の意志に疑問を感じたとき、私はいつもこの二つの文章に戻り、神の意志の通りに努力するよう自分に語りかける。そうするととても簡単に考えられる。いつもそうだとは限らないのだが。

#### 【ワールドサービスミーティングの会場にて】

カリフォルニアを出発したのは10月1日だったが、オークランド到着は10月3日の早朝。この日は私の11年目のAAバースデーだ。これ以上のバースデーがあるだろうか。飛行機のなかでは気づかなかったが、同じ便にウルグアイとメキシコの評議員が乗っていた。マックスとジャンナというキウイの国のメンバーたちが税関の外で待っていてくれた。そしてロス出身で今はこちらに住んでいるアメリカ人のアニタが私たちをホテルまで送り届けてくれた。まだ早朝でもあり、時差もあるため、時差ぼけにやられないためにはともかく寝ないで起きるようにと言われた。

土曜日の晩は地元のキウイ（ニュージーランド人）のメンバーがすでに宿舎に集まっている私たちをミーティングに連れて行ってくれた。グループのメンバーたちは世界中からこんなにたくさんの人たちが自分たちのミーティングにやってきたことに、きつと度肝を抜かれたのではないだろうか。わたしは会場の隅でさっそく山宮さんの通訳を始めた。聖デビッドというミーティング会場はオークランドでも1、2を争う古い会場だ。私にとってまさに印象的だったのは、酔っ払ったまま会場に現れた人と出会ったことだった。顔は赤黒く目は焦点が定まらない状態なのに、それでもミーティングにやってきた。わたしたちにとっていちばん新しいこの仲間は、AA代表者たちの幅広さ、奥行きを探さに心動かされたようだった。この新しい仲間は、自分で“つかむ”ことができるまで、AAにしがみついでいようと思う何かをこの会場で耳にすることができただろうか。わたしはそう願っている。グループのたくさんメンバーたちが山宮さんのそばへ来て、暖かく歓迎した。

日曜日の午後、22カ国から集まった評議員全員が夕食会の前の“レッドボール”ミーティングに参加した。このミーティングは、話し終えた人がボールを投げ、それを受けとめた人が次に話すというも

のだ。私の通訳者としての仕事が早速始まった。このミーティングで私はこれから4日間に自分に望まれていることを、わくわくする思いでつかみとった。このミーティングで分かち合われたひとりひとりの話しは圧倒されるほどの感動を呼び、この地球をはるばる旅してこの場所に居合わせたお互いに対する愛と尊敬にあふれていた。もちろん、これから始まるさまざまな会議での自分の役割を考え不安を募らせている人もいたが、私たちのような者たちが、神の恵みによって、飲まない生きかたを続けることができ、さらに、アルコールクス・アノニマスのためにこのようなサービス活動をやらせていただける奇跡と深い畏敬の念がその不安感を包み込んでいた。

さて、月曜日、いよいよ実際の活動が始まった。会場の後ろに私のための特別なテーブルがセッティングされ、“日本語通訳者”という名札があった。私はこの席でこれから48時間の仕事をこなす。早速自分の準備にとりかかった。ラップトップコンピューター、同時通訳用機器、スペイン語の通訳を聞くためのヘッドホン、電池の予備、メモ用紙、和英辞書、WSMのバインダー一式、そして特大の水差し。これから分かち合わせ、討議され、反論され、また推薦事項として勧告されることのすべてを山宮さんに伝え、そして山宮さんの意見をほかの評議員に伝えることができるのは私しかいないという責任とプレッシャーがこのとき突然のしかかってきて、私の血圧は上がった。けれども私の役割は、山宮さんがこの会場で自分だけみんなとは違うという感じを少しも持たず、みんなの一部分であると感じてもらおうことだと、自分に言い聞かせた。

ここで皆さんに了承していただきたいことは、WSMでどういうことが話し合わせ、どういう結論に達したかをこのニューズレターに書くのは私の役割ではないということだ。それについてはWSM評議員の方から近いうちに報告があるし、最終報告書も何ヶ月かで発行される。したがって、私がここで書くことはあくまでも通訳者として感じたことであり、その仕事を通して私がどう思ったかということだ。

メインの会場はコの字型にテーブルがセットされ、4隅にマイクが置かれていた。山宮さんは私のテーブルからいちばん近い席についた。山宮さんがマイクの前に立ったら、私はただちに別のマイクに行って山宮さんの通訳をすることになる。

私以外にもスペイン語通訳者が二人いて、その人

たちも通訳機器を備えた専属のテーブルがある。さらにもう一人、ポーランド出身で今は地元に住んでいる人がポーランドの評議員の通訳のお手伝いをした。スペイン語圏の仲間がマイクの前に立つと、私はすぐさまヘッドホンをつけて英語の通訳を聞き、それをさらに日本語に通訳する。でもそのとき英語の方だけ集中して聞くのはそんなに簡単なことではなく、スペイン語/英語の同時通訳者が意味を取り違えると、わたしも話しの前後を見失う。そうすると、山宮さんには謝るしかない。また、評議員の中には英語で話していても、聞きなれないアクセントのために何を言っているのかわからないことがあり、そんなときにも山宮さんに謝った。この5日間にずいぶん“済みません”を繰り返した気がする。でも“心で通じる言葉(Language of Heart)”は言語を超えることがあり、山宮さんの反応を見ていると、私が訳し終わらないうちに山宮さんはすべてを理解しているように見うけられたことがたびたびあった。私のボキャブラリーの穴は、心で通じる言葉で埋められることを祈った。

期間中ずっと私の目は会場の正面の垂れ幕に書かれた今回のテーマ“サービス一個人の回復とAAの一体性の基本”という言葉に注がれていた。そのテーマから、AAのために、そしてわたしたちの周囲にいる人たちのために自分たちに何ができるかを考えていた。各国の評議員はその人自身の経験と力と希望をここで分かち合う。私の役割は、単なる言葉の通訳ではなく、そこにある感情や表現をすべて伝え、それによって山宮さんにその意見の真意をつかみ取ってもらうようにすることだ。

かんぺきさを強く求める自分の性格のため(実現したことは一度もないが)、やりすぎてしまったことは何度かあったかもしれない。わたしは評議員の人たちが日を追うごとに変化していく様子を目の当たりにした。そして私も日を追うごとに変わった。パンパンに膨れ上がったうぬばれで自分を過大視していた私が、多くの間違いをしたことで、エゴは見ると打ち砕かれ、ついには自分の正しい立場を知る謙虚さを身につけることができた。

私はあくまでもそこに事務局の一人と参加しているのだ。私の役割は山宮さんが何のハンデもなく、ワールドサービスミーティングに十分に参加できるよう手助けをすることだ。単なる通訳者としての役割は、ワールドサービスミーティング評議員の役割とはまったく違うものであったとしても、アルコール・アノニマスに対する私の愛情と情熱は彼



らと全く変わらないことが分かった。そこに集まった全員が役割を持っていた。それはまるで、ハイパーパワーという指揮者のもとで奏でられる美しいシンフォニーのようだった。委員会でも、ワークショップでも、全体会議でのプレゼンテーションでも、わたしたちはみないっしょに笑い、いっしょに涙を流し、神のなせるわざの奇跡が実際に働くのを目にした。みんなは私が会議ごとに会場から会場へと通訳の機器を運んで移動していくのを目にしたろう。スタッフの人たちはいつもいろいろと助けてくれた。

WSMの公式言語は英語とスペイン語だけだが、木曜日午後の閉会にあたって、評議員が前に一列に並び、15カ国語のそれぞれの母国語で“平安の祈り”を唱えた。もちろん訳す必要はなかった。一人一人が祈りを唱えていったときの会場を埋めつくした一体感も言葉では表現できない。全員の眼に涙があふれていた。

ワールドサービスミーティングはマオリ族文化のデモンストレーションとすばらしいディナーで幕を閉じた。その夜、わたしは山宮さんを仲間の評議員のなかに残した。山宮さんはそこに溶け込み、とても楽しんでいた。評議員の一人が、ワールドサービスミーティングで起こったことは言葉ではとても表現しきれない経験だったと言っていたが、その通りだ。こう言った人もいた。何の変化もなく、あの会場を去る人なんて絶対にはいない、と。私も変わった。私は私の理解する神に対する大きな感謝と謙虚な気持ちで一杯だ。一人のアルコールクに対して私がさせていただいた小さなサービスによって、またそのアルコールクから多くのアルコールクにメッセージが運ばれていくことに対して。私はソブラエティのなかで、私の情熱的な夢をさらに超えた次元にまで神によって導かれた。山宮さんの顔から伺える、仲間たちの中でとてもリラックスしている表情に接し、私は計り知れないほどの充足感を感じた。神が私をちゃんとお使い下さったことを知った。